

## 呂布叛逆考 — 『三国志』研究ノート<2> —

上谷 浩一

### 緒言

本稿は 2007 年度に大阪体育大学体育学部で担当した歴史学の講義ノートに、講義では煩雑を避けて言及しなかった関連研究や史料を加筆したものである。

「三国志」という 3 文字をシラバスに掲げると、ファンであるという学生がたくさん集ってくる。そこで最初は少し雑談をしながら知識の多寡を量るのだが、やはり彼らが好きな「三国志」の話は、小説や漫画、ゲームで得たものがほとんどで、ヒーロー史観に偏り、認識がゆがめられている場合が多い。

しかし同じことは世間一般でも見られ、「三国志に学ぶ人材管理術」といったセミナーでも、史実とはかけ離れた架空の物語に立脚していることが多い。前回紹介した劉備玄德も、その短気や暴力はすべて張飛に押し付けて、誠実な好人物に変身し、「リーダーは周囲の意見によく耳を傾けるべきだ」という教訓の材料にされている。これでは激動の時代の人間の生き様から現代への貴重な教訓を得るという目的を達成できないのではないか。実際の劉備から学ぶべきは、情勢への敏感さと、何度でもチャンスに食らいつく逞しさであろう。

「三国志」がこうなってしまったのは、元となる史実が西晋時代に行われた陳寿の正史『三国志』編纂過程で取捨選択され、さらに 14 世紀以降に羅貫中の『三国志演義』を代表とする芝居物・読物として流布する中で大衆の嗜好に応じたキャラクター設定がされたからである。加えて日本では、江戸時代以降の翻訳、受容の過程で翻案潤飾され、近年のブームの中で小説や漫画がさらにそれを拡大解釈している。こうした長年にわたる重層的な“物語化”が人物や事件の実像を歪めてしまった。1984 年に安徽省馬鞍山市で墓誌が発見された呉の朱然も『三国志演義』では、蜀の趙雲の忠誠と武勇のエピソードのために戦死させられているが、実際には持節・右軍師・左大司馬という高位の武官に昇り、陸遜とともに對魏作戦の中心となった(「安徽馬鞍山東呉朱然墓發掘簡報『文物』1986 年第 3 期)。

同様な例は枚挙に暇がないが、『三国志演義』で最大の悪役とされた董卓はその際たるものであろう。すでに正史(『三国志』や『後漢書』)の段階で悪人ぶりが述べられ、それが註解の過程で強調されてきた。今回は彼の实像を探りながら、暗殺の真相を考えてみたい。

『三国志演義』では、正義に燃える王允が美女貂蟬を送り込み、それに誑かされた呂布が嫉妬心から董卓を殺すというドラマティックな筋立であるが、架空の存在である貂蟬には依拠できない。また正史『三国志』には董卓と呂布の感情のもつれが記されているが、

これでは本能寺の変の原因を織田信長の暴力への明智光秀の怨恨で説明して納得してしまうような議論である。当時の政情を考慮せずに個人の性向に帰納しがちな研究傾向を方詩銘氏が批判されているが（『三国人物散論』上海古籍出版社、2000年）、本稿も『三国志』の董卓伝と呂布伝に抛りながら、暗殺の背景を当時の政治情勢から検討していきたい。

## I 中国古代の“本能寺の変”

天下統一を目前にしていた織田信長が家臣の明智光秀の謀反によって京都の本能寺で殺されたのは天正十年（1582）の六月であったが、それより約1400年前の初平三年（192）四月、中国の長安で、同様に強大な権力を握っていた董卓が謀反によって殺された。

『三国志』董卓伝によれば、その日は体調を崩していた獻帝が回復したので、宮城の未央殿に百官が集められた。暗殺の首謀者は司徒の王允で、実行役は董卓の親衛隊長で親子の契りまで結んでいた呂布であった。呂布は同郷の李肅に腹心十人あまりを率いさせ、衛士の制服を着せて宮門の脇のくぐり戸を固めさせ、自らも懷に（董卓誅殺を命じる）詔書を入れて待機した。董卓が到着すると李肅らが立ちはだかった。董卓が驚いて「呂布はどこか」と呼ぶと、呂布は「これは詔（皇帝の命令）です」と応じ、董卓に止めを刺した。

その記事の註に引く『英雄記』によれば、事件の前に、布に「呂」の字を書いて「呂だ！呂だ！」と歌いながら市場を歩く男がいるという報告があったが、董卓はそれが呂布を警戒せよという意味だと気がつかなかったという。また「千里の草は青青としているが、十日後を占ったら、枯れている」という不吉な噂もなされていた。

こうした中で、董卓もまったく油断していたというわけではない。同じく『英雄記』によれば、出発にあたって護衛部隊を整え、長安郊外の陣営から宮殿まで部下を並ばせ、その間を行進してきた。また董卓の乗馬が躓いて進まなかったので、一度は胸騒ぎを感じて中止しようとしたが、呂布が行くように勧めたので、下に甲冑を着込んで出発したという。

それなりに用心はしていたのだが、肝心の親衛隊長の呂布が裏切っていたのではどうしようもなく、あっけない最後を遂げることになったのである。しかし、あまりにも簡単に暗殺が成功していないか、という疑問を感じる。さらに不可解なのは、事件後に董卓の一族与党が処刑されたが、朝廷内では董卓の主簿（事務官）であった田景ら数名が殺されただけで、ほとんどの者は何も動かず、処分もされなかったと『三国志』が述べている点である。なぜ董卓は、中央政府の官僚を腹心で固めておかなかったのだろうか。

## II 董卓の人物像

暗殺後に董卓の遺体は長安市民の集まる市場でさらされ、肥満した身体から大量の膏（あ

ぶら)が流れ出た。そこで見張り番が臍に芯を置いて火をつけると、数日間灯っていたという。これが実現可能かどうかはかなり疑わしいが、高等学校の世界史の授業でもよく紹介される逸話である。『三国志演義』には、これに加えて、美女貂蟬をめぐる呂布との恋のさや当てでの小心ぶりや、少帝暗殺や住民虐殺などの残酷なエピソードが登場し、短気で粗野な乱暴者という戯画化された董卓像が描かれ、それが一般化している。

しかし『三国志』や『後漢書』の記録からは、それとは違った人物像が見て取れる。

彼は西北の涼州隴西郡で生まれ、戦場を逞しく生き抜いてきた人物である。方詩銘(『曹操・袁紹・黄巾』上海古籍出版社、1995年)の指摘のように、在地の有力な一族であったようで、『後漢書』列女伝では遊牧民の血を引くと伝えられている。その真偽は確認できないが、馬上弓射が得意で、何よりも優れた部隊指揮官であった。張大可(『三国志研究』甘肅人民出版社、1988年)が整理するように、後漢後期に涼州で活躍した皇甫規ら名将たちに最前線の指揮を任せられ、また黄巾の乱が起きると征伐軍の中郎将(軍団長)に抜擢されたのも、その能力が高く評価されていたからに他ならない。

そして政変前には、陳勇(「董卓進京述論」『中国史研究』1995年4期)が指摘するように、涼州で数万人の胡漢混成の軍事集団を組織していた。中央が不安を感じて繰り返し彼を部隊から切り離そうとし、少府(内務大臣)や并州の牧(行政長官兼方面軍司令官)という高いポストを提示したことからも、彼の握っていた軍事力の強大さが想像できる。

董卓の優れた能力は、政権を掌握していく過程でも、遺憾なく発揮された。

一八九年の靈帝の急死で起きた政変(「中平六年の政変」)で、「西園軍」と呼ばれる強力な中央軍を率いた大將軍何進が宦官に暗殺され、その復讐戦で宮城は戦場となり、宦官が皆殺しにされた。復讐戦の中心となったのは袁紹であったが、董卓はその混乱を上手く利用して実権を握る。しかもその時、董卓は配下の涼州の軍団が洛陽への長期の出動を嫌がったようで、わずかな手勢を率いるだけだったのである

その劣勢を、『後漢書』董卓伝や『三国志』董卓伝に引く『九州春秋』に

最初、董卓が洛陽に入ったとき、兵士は三千に過ぎなかった。兵が少ないと天下に号令できないと考え、四、五日ごとに夜にこっそりと軍を出動させ、翌日の昼間に旗や太鼓で飾り立てて戻らせた。そして涼州の部隊がさらに到着したと宣伝した。

とある、見事な奇策で乗り切り、次々とライバルの軍団を吸収し、圧倒的な軍事力を確保して政権を掌握したのである。

ここで大きな障害となったのが袁紹の存在である。彼は当時最高の名門である汝南郡の袁氏の出身で、政界に縁故も多く、何進の第一の側近であり、加えて「西園軍」で中軍校尉(上級指揮官)を務めており、何進の後継者候補の筆頭と目されていたと思われる。

その障害も董卓は上手く乗り越えていく。彼は洛陽郊外で逃亡中の少帝一行を保護し、その弟で幼少(九歳)の獻帝を擁立した。また、袁紹にライバル心を持つ袁術を後將軍に任じて取り込み、袁氏勢力の分断に成功した。

さらに『後漢書』董卓伝に何進らの部隊は董卓に属したとあるから、「西園軍」の取り込

みにも成功したようである。「西園軍」には、前稿『劉備玄德の青年時代』で紹介したように、お尋ね者になった劉備の一行も合流しており、社会のアウトローや異民族の若者を集めていた。董卓は彼本人が戦陣暮らしに慣れているだけでなく、その配下にも叩き上げの部将が並んでいた（前掲張論文）。逆に袁紹は名門の貴公子で、実戦の経験は皆無である。兵士の心情の把握では、董卓に一日の長以上のものがあつたのだろう。

袁紹を排除した後、次に狙つたのが丁原の握る并州の軍団である。当時、涼州の兵士と并州の兵士は最強と並び称されていた（『後漢書』蔡邕伝）。地域的に見れば、前者はチベット系、後者はモンゴル系の遊牧民族が主力であつたと想定できる。董卓は呂布を言葉巧みに説得し、丁原を殺させた。その際に動揺が起きなかつたのは、呂布が并州軍団の実質上の指揮官であつたからであろう。このように、董卓の手配は非常に的確である。そして事態がここまでくると、最期の抵抗勢力であつた袁術も逃亡せざるを得なくなつた。

かくして対抗馬はすべて排除され、後漢王朝は有名無実となり、事実上の董卓政権が確立することになった。8月の何進暗殺から始まり、12月の相国就任まで、わずか4ヶ月という短期間に、しかも武力を損耗することなく成し遂げた、鮮やかな政権掌握であつた。

### Ⅲ 董卓と王允

董卓暗殺の仕掛人となつたのが王允である。先に、あまりにも簡単に暗殺が成功していないか、という疑問を述べたが、それを推理していく糸口は董卓の人事政策にある。

王允は魏晋南北朝から隋唐時代にかけて全国に名を轟かせる名門太原王氏の出身である。『後漢書』王允伝に「性格は剛毅で悪をにくむ」という評価が見え、大將軍何進の従事中郎（事務官）から河南尹（首都市長）に転じた。「中平六年の政変」の頃には司隸校尉の袁紹とともに首都圏を管轄し、何進の腹心として活躍していたことになる。

ところが同じく王允伝には

初平元年（190年、獻帝は長安に移っていた）……当時の董卓は洛陽に留まり、政治運営はすべて王允に委任していた。王允は気持ちを抑え、考えを曲げていつも服従し、董卓も同じく気遣いをしたので、齟齬や疑念が起きなかつた。

と、董卓の信任ぶりや互いの気配りの様子が述べられている。

王允だけではない。これより先、董卓は相国になるとすぐに太尉に黃琬、司徒に楊彪、司空に荀爽という人望に沿った三公人事を行った。さらに『後漢書』董卓伝を見ると

董卓は、宦官が忠良な人々（李膺や陳蕃らの儒家官僚）を殺したことを天下の人々が憎んでいると聞き、政権を握ると、ひどい行いもしたが、辛抱もして人材を起用した。吏部尚書（人事局長）に漢陽の周璠、侍中（皇帝秘書）に汝南の伍瓊、尚書（局長）に鄭公業、長史（副官）に何顛らを任じ、處士（無官）の荀爽を司空にした。黨錮に連座した陳紀、韓融らは、皆な大臣クラスにした。冷遇されていた人物もたくさん抜

擢され、尚書の韓馥を冀州刺史とし、侍中の劉岱を兗州刺史し、陳留の孔伋を豫州刺史とし、潁川の張咨を南陽太守とした。

とある。そして洛陽から逃走した袁紹まで、平原郡の相（知事）で遇したのである。

こうした記事に加えて、『後漢書』董卓伝には、

董卓の親愛する人物はともに顯職につけてもらえず、将校になれただけであった。

とある。『三国志』董卓伝は「一族姻戚が朝廷に並んだ」と述べ、『三国志演義』以来、董卓には一族や腹心ばかり重用し、正義を唱える後漢官僚を恣に誅戮した暴君という絶対悪のイメージが定着してきた。しかしそれは董卓の実際の行動とは異なっている。彼は後漢時代に官界の中心を占め社会的影響力を拡大してきた儒家官僚に気を遣い、過剰なくらい彼らを政権中枢部に置き続けたのである。暗殺の折の連座者が三人だけというのも、側近より儒家官僚を重用したことの証左なのではないか。

ところが袁紹らが関東で反乱を起こすと、抜擢した人物が次々と裏切った。しかしそこでも少数の内通者を処刑しただけで、逆に王允を三公に起用した。抵抗勢力として一度は免職された黄琬、楊彪まで再起用され、黄琬は司隸校尉となって暗殺計画の一翼を担った。

譲歩しすぎたことが、かえってクーデターを成功させてしまったのである。

#### IV 董卓と呂布

最後に、クーデターの実行役となった呂布について考えたい。彼の出身地である五原郡九原県は并州の北端に位置し、黄河湾曲部（オールドス地方）の外側で、モンゴル草原の南端になる。遊牧民と雑居する土地柄もあって騎射にすぐれ、その武勇を認められて并州の役人（武官であろう）に登用された。刺史の丁原の信任が厚く、河内郡に進駐するに当たっても、彼を同行させた。そして洛陽への進軍にも同行したが、その後の混乱の中で呂布は董卓側について丁原を殺害し、その部隊を引き継いだのである。

董卓は彼と父子の契りを結び、子飼いの部下たちを差し置いて親衛の役割を委ねた。育ちが似ていたので気心が通じたことが想像されるが、親交だけではなく重責まで任せたのは、彼の率いる部隊が陣営内で最も精強だからであろう。本来の武力基盤であった涼州の部隊が洛陽進軍に同行しなかった、という弱点がここにも影響しているようである。

では、その呂布がなぜ裏切ったのか。『三国志』呂布伝には

以前に些細なトラブルがあり、（そこで怒った）董卓は飾り物の戟で殴ろうとした。呂布は受け止めて身をおかし、丁寧に謝ったので、董卓も許した。呂布はこれがきっかけで心の中で董卓を怨んだ。また、董卓は常に呂布に官邸の護衛を任せていたが、ひそかに侍女と密通していたので、ばれたらどうしようと不安を感じていた。それ以前から司徒の王允は同郷の勇者として厚遇してくれていた。後に王允を訪ねて董卓に殺されかけたことを話した。ちょうど王允と尚書僕射の士孫瑞は密かに董卓殺害を謀議

しており、話を打ち明け、裏切らせようとした。呂布が「親子の契りをどうしよう」と言うので、「君の姓は呂で、血縁ではない。今、殺されそうだというのに、なぜ親子の契りを気にするのだ」と話した。呂布も納得し、自ら刀で董卓を刺した。

とある。貂蟬の物語は、この侍女との密通の話がもとになったようであるが、殴られかけたことも含めて、些細とも思えることがらである。それだけでは、天下を狙う最高権力者の腹心という恵まれた地位を破棄してしまう理由としては不十分である。涼州から董卓に従ってきた武將たちとの厳しい対立も起きていたが、それも決定的理由にはならない。董卓が呂布の握る武力を必要不可欠とする限り、その地位はこれからも安泰だからである。

しかし、現実には、呂布の武力が不要になる事情が存在したのである。

董卓は先ず洛陽に入城して権力を掌握したのであるが、獻帝を擁立するとすぐに長安に遷都した。そしてさらに西へ 260 里（約 100km）離れた鄜の「萬歳塢」へと、本拠を移していくのである。關東で袁紹らが挙兵し、并州でも黒山賊の張燕の活動が盛んであったから、董卓が本来の軍事基盤であった涼州に近づこうとしたのは当然な選択であろう。しかし政権の重心が涼州に移ると、涼州人側は新たな仲間と合流できるが、呂布ら并州人側は新たな兵士の募集も困難になり、重大な勢力の低下が生じる。これまでのトラブルを考えれば、それは近い将来の自らの没落を確信させるものであろう。こうした事情が背後にあったからこそ、些細なことがらも破滅の予兆ととらえてしまったのではないか。本能寺の変の背景には諸説があるが、室町幕府や朝廷との仲介役として織田信長に仕えてきた明智光秀が、幕府滅亡でその存在意義を低下させ、ついには朝廷や足利義昭らの陰謀に加わったと見れば、呂布と明智光秀の謀反の根底には共通するものが存在するようである。

そして結末でも両者は同じ道を歩んだ。暗殺後、涼州人は呂布の慰撫に応じず、結束して反撃に出たので、わずかな日数で呂布らは敗れ、王允は殺された。呂布はかろうじて命を保てたが、長安を捨てて長い流浪の日々を過ごすことになり、最期は徐州に拠ったものの、曹操に捕らえられて処刑されてしまった。彼も儂い「三日天下」であった。

おわりに

以上のように、本稿ではクーデターの原因を当時の政情から説明することを試みてきた。しかし、すでに過去に選択の中で捨て去られてしまったことがらも多く、わずかな史料から推測を重ねざるをえなかった。現在中国各地で画期的な出土史料の発見が続いているから、近い将来に、本稿の論旨を補うもの、或いは全く異なる新しい事実を伝えるものが見つかるかもしれない。とりあえずは、より蓋然性の高い仮説の一例として本稿を御覧いただきたい。また、講義を元にした研究ノートという体裁から細かな考証や史料批判を省いた点も多いが、それについては董卓像の全体的見直しという形で別稿を準備したい。

『三国志・魏書』卷六 董卓伝 原文及び注の抜粋（丸数字）

一【 】内の数字は本文の各章に対応する。

【Ⅱ】董卓字仲穎、隴西臨洮人也。少好俠、嘗游羌中、盡與諸豪帥相結。後歸耕於野、而豪帥有來從之者、卓與俱還、殺耕牛與相宴樂。……卓有才武、旅力少比、雙帶兩鞬、左右馳射。為軍司馬、從中郎將張奐征并州有功、拜郎中、賜縑九千匹、卓悉以分與吏士。……遷中郎將、討黃巾。……靈帝崩、少帝即位。大將軍何進與司隸校尉袁紹謀誅諸閹官、太后不從。進乃召卓使將兵詣京師……。卓未至、進敗。中常侍段珪等劫帝走小平津、卓遂將其衆迎帝於北芒、還宮。時進弟車騎將軍苗為進衆所殺、進、苗部曲無所屬、皆詣卓。卓又使呂布殺執金吾丁原、並其衆、故京都兵權唯在卓①。

①九州春秋曰：卓初入洛陽、步騎不過三千、自嫌兵少、不為遠近所服；率四五日、輒夜遣兵出四城門、明日陳旗鼓而入、宣言云「西兵復入至洛中」。人不覺、謂卓兵不可勝數。

……俄遷太尉、假節鉞虎賁。遂廢帝為弘農王。尋又殺王及何太后。立靈帝少子陳留王、是為獻帝。卓遷相國、封郿侯。……卓既率精兵來、適值帝室大亂、得專廢立、據有武庫甲兵、國家珍寶、威震天下。卓性殘忍不仁、遂以嚴刑脅衆……卓以山東豪傑並起、恐懼不寧。

【Ⅲ】初平元年二月、乃徙天子都長安。焚燒洛陽宮室、悉發掘陵墓、取寶物。卓至西京、為太師、號曰尚父。……宗族內外並列朝廷。……築郿塢、高與長安城埒、積穀為三十年儲、云「事成、雄據天下、不成、守此足以畢老」。……法令苛酷、愛憎淫刑、更相被誣、冤死者千數。百姓嗷嗷、道路以目。悉椎破銅人、鐘虡、及壞五銖錢。更鑄為小錢、大五分、無文章、肉好無輪郭、不磨鑿。於是貨輕而物貴、谷一斛至數十萬。自是後錢貨不行。

【Ⅰ】三年四月、司徒王允、尚書僕射士孫瑞、卓將呂布共謀誅卓。是時、天子有疾新愈、大會未央殿。布使同郡騎都尉李肅等、將親兵十餘人、偽著衛士服、守掖門。布懷詔書。卓至、肅等格卓。卓驚呼布所在。布曰「有詔」、遂殺卓、夷三族。主簿田景前趨卓屍、布又殺之。凡所殺三人、余莫敢動。①長安士庶鹹相慶賀、諸阿附卓者皆下獄死。

①英雄記曰：時有謠言曰：「千里艸、何青青、十日卜、猶不生」。又作董逃之歌。又有道士書布為「呂」字以示卓、卓不知其為呂布也。卓當入會、陳列步騎、自營至宮、朝服導引行其中。馬蹶不前、卓心怪欲止、（呂）布勸使行、乃衷甲而入。……暴卓屍於市。卓素肥、膏流浸地、草為之丹。守屍吏暝以為大炷、置卓臍中以為燈、光明達旦、如是積日。……卓塢中金有二三萬斤、銀八九萬斤、珠玉錦綺奇玩雜物皆山崇阜積、不可知數。